

第三部第三〇～三二章とマルクス・エンゲルスと大谷氏

目次

『資本論』第三部第五篇「第三〇～三二章」の概要

- ・ 第三〇～三二章の編集の経緯
- ・ 第三〇～三二章の内容の概要

「第三〇～三二章」にかかわる大谷氏の論及と青山の若干のコメント

- ・ 第三〇～三二章に関しての大谷氏の考え・意見
- ・ 「第30～32章の草稿、それとエンゲルス版との相違」から
- ・ 「補章6 マルクスは monied capital という語をどこからとったのか」から

「第三〇～三二章」にかかわる大谷氏の論及についての青山の総括

『資本論』第三部第五篇「第三〇～三二章」の概要

・ 第三〇～三二章の編集の経緯

「第三〇～三二章」は、マルクスの草稿(第3部第1稿)第五章の「Ⅲ」から編集されました。

エンゲルスは「第三〇～三二章」の編集について「序文」で、次のように述べています。

「第五篇」の第二章から第二十九章までは、若干の手入れが必要だった。「ところが、第三〇章からはほんとうの困難が始まった。ここからは、引用文から成っている材料を正しい順序に置くことだけではなく、絶えず挿入文や脱線などに中断されながらまた別の箇所ではしばしばまったく付随的に続けられている思想の進行を正しい順序に置くことも必要だった。こうして第三〇章は入れ替えや削除によってできあがり、この削除されたもののためには別の箇所で使いみちが見いだされた。」「第三章は再びかなりよくまとめて書き上げてあった。」

次に、「『混乱』という表題をつけた長い一篇が続き」、それを「批判的に風刺的に取り扱おうと」「いろいろやってみたあげくに、この章を組み立てることは不可能だということをとった。」「その次には、私が第三二章で取り入れたものがかなりよく整理されて続いていた。」「『混乱』からあとの、そしてすでにそれ以前の箇所で取り入れられなかったかぎりでの、すべてのこれらの材料から、私は第三三～三五章をまとめ上げた。」

・ 第三〇～三二章の内容の概要

「第三〇章 貨幣資本と現実資本 I」の概要

第二十九章で見た「銀行資本の諸成分」の市場での機能をより深く論究し、①貨幣資本の蓄積はどの程度まで現実の資本蓄積の指標であるのか？、②貨幣逼迫はどの程度まで現実資本の欠乏を表しているのか？、という問題を「産業循環」のなかで見っていきます。

これから取り扱うテーマ

貨幣資本の蓄積とは、一方の私的貨幣資本家と他方の国家や自治体や再生産する借り手とのあいだに立つ媒介者としての銀行業者(職業的な貨幣の貸し手)の手のなかでの富の蓄

積のことである。「この(産業家や商人が必要とする——青山)貸付資本の蓄積こそは、われわれがここで取り扱わなければならないものであり、しかもそれは特に貸付可能な貨幣資本の蓄積である。」ここでは、ただ、媒介者としての銀行業者によって産業家や商人に与えられる貨幣貸付だけを問題にする。

商業信用の分析

といっても、われわれはこの点(商業信用)もあらかじめもっと詳しく研究しなければならない。そこで、まず第一に、商業信用、すなわち再生産に携わっている資本家たちが互いに与え合う信用を分析してみよう。

この純粋な商業信用の循環については、第一に、このような相互の債券の決済は、資本の還流にかかっており、第二に、この信用制度は、現金支払いの必要をなくしてしまうものではない。だから、「この商業信用にとっての限界は、それ自体として見れば、(1)産業家や商人の富、すなわち還流が遅れた場合の彼らの準備資本処分力であり、(2)この還流そのものである。」(『資本論』大月版④ P615、以下では、『資本論』第三部第五篇「第三〇～三二章」の概要)での『資本論』大月版④からの引用については、ページのみを表記します。)

「信用は、量的には生産の価値量の増大につれて増大し、時間的には市場がますます遠くなるにつれて長くなる。ここでは相互作用が行なわれる。生産過程の発展は信用を拡大し、そして信用は産業や商業の操作の拡大に導くのである。」再生産の循環のなかの信用——銀行業者信用は別として——が多いということは、貸付のために提供されていて有利な投下を求めている遊休資本が多いということではなくて、再生産過程で資本が大いに運用されているということである。「還流が遅れ、市場は供給過剰になり、価格は下落し、その結果として停滞が現れるならば、そこにはすでに産業資本の過剰がある。といっても、それは産業資本がその機能を果たすことができなくなるという形での過剰である。」信用は再生産過程の膨張とともに膨張し、再生産の停滞とともに収縮する。再生産過程の膨張に攪乱が生ずれば、またはただその正常な緊張に攪乱が生じただけでも、それとともにまた信用の欠乏も現れる。

ところが、いま、この商業信用に本来の貨幣信用が加わると、その結果、「一部はただの融通手形やりくりによって、また一部はただ手形づくりを目的とする商品取引によって、全課程が非常に複雑にされるのであって、外観上はまだ非常に堅実な取引と順調な還流とが静かに続いているように見えても、じつはもうずっと前から還流はただ詐欺にかかった金貸業者とか同じく詐欺にかかった生産者とかの犠牲によって行なわれているだけだということにもなるのである。それだから、いつでも事業は、まさに破局の直前にこそ、ほとんど過度にまで健全に見えるのである。」(P619)

ここでまた貨幣資本の蓄積に帰ることにしよう

労働者たちの消費能力は、一方では労賃の諸法則によって制限されており、また一方では、労働者は資本家階級のために利潤をあげるように充用されうるかぎりでは充用されないということによって制限されている。すべての現実の恐慌の究極の原因は、やはり、資本主義的生産の衝動に対比しての大衆の窮乏と消費制限なのであるが、この衝動は、まるでただ社会の絶対的消費能力だけが生産力の限界をなしているかのように生産力を発展させようとするのである。資本主義的生産様式における「産業循環」のなかでの商業信用

と貨幣資本の変化を見てみよう。

産業循環の発端の時期の商業信用と貨幣資本

恐慌を切り抜けた直後には貸付資本が大量に遊休し、産業循環の発端では低い利子率と産業資本の収縮とが同時に現れ、商業信用は収縮している。これは、「産業資本の収縮と麻痺とによる貸付可能資本の増加にほかならないのである。」(P620)

好転の時期と過度な緊張の状態の直前の繁栄状態の時期の商業信用と貨幣資本

「再生産過程が、再び、過度な緊張の状態の直前の繁栄状態に達したならば、商業信用は非常に大きく膨張するのであるが、その場合、この膨張には、実際に再びまた、円滑に行なわれる還流と拡大された生産という「健全な」基礎があるのである。この状態では、利子率は、その最低限度よりは高くなるとはいえ、やはりまだ低い。じっさい、この時期こそは、低い利子率、したがってまた貸付可能な資本の相対的な豊富さが産業資本の現実の拡張と一致すると言える**唯一**の時点なのである。商業信用の拡大と結びついた還流の容易さと規則正しさとは、貸付資本の供給を、その需要の増大にもかかわらず、確実にして、利子率の水準が上がるのを妨げる。」(P624)

②恐慌後の「好転」の時期は、最低限度よりは高い利子率であるが、この低い利子率は、商業信用がまだ自分の足で立っているのでわずかな度合いでしか銀行信用を必要としないということを表している。

③利子率はその平均的な高さ、すなわちその最低限度からも最高限度からも同じ距離にある中位点に達する段階

この、②と③の二つの時期だけが、豊富な貸付資本と産業資本の大膨張とが同時に現れる場合を示している。

繁栄状態から過度な緊張の状態へ

「他方、こうなると、準備資本なしに、またはおよそ資本というものなしに、事業をし、したがってまったく貨幣信用だけに頼って操作をする騎士たちが、ようやく目につくようになってくる。いまではまた、あらゆる形での固定資本の大拡張や、新しい巨大な企業的大量設立が加わってくる。そこで、利子はその平均の高さに上がる。」

恐慌への道、循環の終わり

過剰生産(信用とそれに伴う一般的な価格膨張とによって助長された過剰生産＝市場の非常な供給過剰)と商品取引での無際限な投機的思惑を秘めた幻惑的景気との時期には、生産は生産諸力を最高度に緊張させて、ついには生産過程の資本主義的制限をも越えさせてしまうのである。「そして、利子が再び最高限度に達するのは、新しい恐慌が襲ってきて、急に信用が停止され、支払が停滞し、再生産過程が麻痺し、前に述べたような例外はあるにしても、貸付資本のほとんど絶対的な欠乏と並んで遊休産業資本の過剰が現れるようになるときである。」循環の終わりには高い利子率と産業資本の過剰豊富とが同時に現れる。商業手形の多くは現実の売買を表しているのであって、この売買が社会的な必要をはるかに超えて膨張することが結局は全恐慌の基礎になっているのであるが、「再生産過程の全関連が信用を基礎としているような生産体制のなかでは、急に信用が停止されて現金払いしか通用しなくなれば、明らかに、恐慌が、つまり支払手段を求めての殺到が、起こらざるをえない。だから、一見したところでは、全恐慌がただ信用恐慌および貨幣恐慌としてのみ現われるのである。」**全恐慌がただ信用恐慌および貨幣恐慌としてのみ現わ**

れる。このように、「恐慌期には支払手段が欠乏しているということは自明である。」しかし、「1844/45年のそのような無知でまちがった銀行立法がこの貨幣恐慌をひどくすることもありうる。」(P626)

なお、商品資本は、「潜勢的な貨幣資本としては、それは不断の膨張収縮を免れない。」恐慌の最中の、「このような物価崩落は、ただ以前の価格膨張を埋め合わせるだけである。」(P628)

この産業循環は、ひとたび最初の衝撃が与えられてからは同じ循環が周期的に再生産されざるをえないというようになっていく。貸付可能な貨幣資本の増加は、必ずしも現実の資本蓄積または再生産過程の拡張を示しているのではない。利率に表される貸付資本の運動は概して、産業資本の運動とは反対の方向に進むのである。

架空資本と恐慌

とにかく、ここではすべてがゆがんで現れるのである。なぜならば、この紙の世界ではどこにも実在の価格やその実在の諸契機は現れないのであって、ただ、地金や硬貨や銀行券や手形や有価証券が現れるだけだからである。

会社事業の所有権(株式としての利子生み資本)は現実資本に対する権利であるが、この権利は「現実資本の紙製の複製」であり、「この資本にたいする自由処分力を与えるものではない。この現実資本を引きあげることはできない。その所有権は、ただ、この現実資本によって獲得されるべき剰余価値の一部分にたいする請求権を与えるだけである。」

「それ(利子生み資本——青山)の価値額は、すなわち取引所でのその相場づけは、利潤率の低下が貨幣資本の特有な運動にはかかわりなく利潤率の傾向的低下の単なる結果であるかぎり、この利潤率の低下につれて必然的に上がる傾向がある。したがって、価値表現から見ればその可除部分のそれぞれが一定の元来の名目的価値をもっているこの想像的な富は、すでに前述のような理由からも、資本主義的生産の発展の歩みのなかで膨張してゆくのである。」「この投機が労働に代わって資本所有の本来の獲得方法として現われ」る。

その株式の価格は、「一部は、その株式を支払指図証とする収入が減少したために、また一部は、その株式が非常にしばしば山師的な性質の企業を代表しているために、低落する。……とはいえ、相場表のなかでこのような有価証券の貨幣名が下落するという事は、それらが表している現実資本とはなんの関係もないのであり、反対にその所有者たちの支払能力には大いに関係があるのである。」

産業循環の周期について

マルクスは、産業循環の周期について、第一部の注で、「競争に加わる工業国の数が十分なものになったとき、このとき以来はじめてかの絶えず再生産される循環は始まった」こと、その循環の終点として一般的恐慌があること、「これまでのところでは、このような循環の周期の長さは10年か11年であるが、しかし、この年数を不変なものとするべき理由はなにもない。反対に、いまわれわれが展開してきたような資本主義的生産の諸法則からは、この年数は可変だということ、そして、循環の周期はしだいに短縮されるということ」を推論せざるをえないのである。」と述べていますが、エンゲルスは、ここで、「従来は循環周期が10年だった周期的過程の急性的形態は、相対的に短くて弱い景気好転と相対的に長くて決定的でない不況との、より慢性的な、より長く引き伸ばされた、いろいろな工業国に別々の時期に分かれて現れる交替に変わったように見える。しかし、たぶん問

題はただ循環周期が長くなったということだけであろう。世界貿易の幼年期だった一八一五～一八四七年には、ほぼ五年の循環周期を指摘することができる。1847～1867年には循環周期は明確に一〇年である。われわれは前代未聞の激しさの新しい世界恐慌の準備期にあるのだろうか？いろいろなことがそれを暗示しているように思われる。」と優しく訂正しています。エンゲルスのマルクスにたいするこのような態度は、マルクス・エンゲルス・レーニンに対して、鬼の首でも取ったかのように噛みつく不破さんとは大違いです。

「第三〇章」に関して、現代の私たちが留意すべき点について

現代の産業循環においては、信用による価値実現の短縮（商品資本が最終的に売れていないのに貨幣資本となって価値実現されること）による架空の需要はかなりの程度コントロールされていますが、市場で取引される「利子生み資本」の価格は、予想され前もって計算された収入（現代の会計の言葉でいえば、時価評価にもとづく時価会計）によって規定されるので、資産価値の増大とリンクして相乗効果を発揮する「利子生み資本」＝「架空資本」の価格の膨張が「産業循環」のピークを演出します。このように、信用による価値実現の短縮を恐慌の原因のようという不破さんの「恐慌の運動論」なるものは、現実を正しく反映したものでは、まったく、ありません。

産業循環の周期について

エンゲルスは「従来は循環周期が10年だった周期的過程の急性的形態は、相対的に短くて弱い景気好転と相対的に長くて決定的でない不況との、より慢性的な、より長く引き伸ばされた、いろいろな工業国に別々の時期に分かれて現れる交替に変わったように見える。しかし、たぶん問題はただ循環周期が長くなったということだけであろう。」と述べていますが、現代では短い景気循環が3年程度の周期で繰り返されており、長期の景気循環の最近のピークはリーマン危機の前ですが、100年に一度と言われたリーマン危機は「ヘリコプターベン」と世界の成長エンジンとなった中国の財政出動によって救われました。

不破さんの「恐慌の運動論」の行き着く先

なお、マルクスが「恐慌や思惑の最も有効な媒介物の一つ」と言った「銀行と信用」の一部を抽出して、価値実現の短縮による架空の需要が恐慌の元凶のように言う不破さんは、資本主義的生産様式の矛盾を正しく認識することができないので、次の「第三章」の「現実資本すなわち生産資本および商品資本の蓄積については、輸出入統計が一つの尺度を与える。そして、いつでもそこに示されているのは、10年の循環周期で運動するイギリス産業の発展期(1815-1870年)のあいだは、いつでも、恐慌の前の最後の繁栄期の最高限が、次にくる繁栄期の最低限として再現し、それからまたそれよりもずっと高い新たな最高限に上がって行くということである。」(大月版『資本論』⑤ P641)という文章から、資本主義に対するとんでもない理解に到達します。

しかしそれは、次の「第三章」を見るなかで、みなさんと一緒に見ていきましょう。

「第三章 貨幣資本と現実資本II(続き)」の概要

すでに見たように、産業循環の発端の時期と恐慌後の好転は始まっているがまだ商業信用が銀行信用をわずかしか要求しない時期には、貸付資本の堆積、その過剰豊富が生ずることもありうる。どちらの場合にも、低い利子が、利潤のうちの企業者利得に転化する部分を増大させ、現実の蓄積過程の拡張が促進されます。

すでに見たように、貸付資本の蓄積は、少しも現実の蓄積なしに、単に技術的な手段によって、たとえば銀行制度の拡張や集中、流通準備の節約、あるいはまた個人の支払準備金の節約によって、行なわれうるのであって、これらの準備金はこうしていつでも短期間貸付資本に転化させられるのである。

とにかく、貸付資本の量は通貨の量とはまったく別である。利子率の変動は貸付資本の供給によって左右されるが、この貸付可能な貨幣資本の量は、流通している貨幣の量とは違ったものであり、またそれにはかかわりのないものである。

「現実資本すなわち生産資本および商品資本の蓄積については、輸出入統計が一つの尺度を与える。そして、いつでもそこに示されているのは、10年の循環周期で運動するイギリス産業の発展期(1815-1870年)のあいだは、いつでも、恐慌の**前**の最後の繁栄期の最高限が、次にくる繁栄期の最低限として再現し、それからまたそれよりもずっと高い新たな最高限に上がって行くということである。」(P641-642)

※なお、あとで見るように、草稿では「いつでも、恐慌の**前**の最後の繁栄期の最高限が、次にくる繁栄期の最低限として再現し、それからまたそれよりもずっと高い新たな最高限に上がって行くということである。」の部分が「どの恐慌期のあと等々でも、その前の産業循環で達成された最高水準が、次の産業循環での土台または比較的低位の水準となること、を示しておきたい。」となっています。エンゲルスは『資本論』の編集にあたって、わかりやすく鮮やかな表現に努めましたが、「次の産業循環での土台または比較的低位の水準となる」というところを「次にくる繁栄期の最低限として再現し」と変えたことは、『資本論』を邪に利用しようとする人に利用される恐れがあるので、草稿のとおりの方がよかったかもしれません。

貨幣資本の蓄積は、異常な金流入によって起きることがありうる。

貨幣資本家の蓄積源泉となる利潤は、ただ、再生産資本家を取りだす剰余価値からの一控除分でしかないが、すべて貨幣貸付資本家が行なう蓄積は、言うまでもなく、つねに直接に貨幣形態で行なわれる。

産業循環の不況の段階で、国債証券やその他の有価証券の価格は下がる。貨幣資本家たちは、これらの減価した証券を大量に買い集め、そして、上がったら、これらの証券は売り放たれて貨幣資本家たちの貸付可能な貨幣資本に転化される。

あらゆる貨幣は貸付資本の契機になる。信用制度とその組織との発展につれて、収入の増大、すなわち産業資本家や商業資本家の消費の増大でさえも、貸付資本の蓄積として表されうるのである。

貸付可能な貨幣資本の蓄積は、再生産過程の現実の拡大に伴って信用制度が拡張されるごとに、それにつれて増大せざるをえないのである。

現代の私たちが留意すべき点

・ 不破さんの「第三章」の文章を「歪曲」してのマルクスの「修正」

「第三章」の概要は以上のとおりですが、ここに出てくる「現実資本すなわち生産資本および商品資本の蓄積については、輸出入統計が一つの尺度を与える。そして、いつでもそこに示されているのは、10年の循環周期で運動するイギリス産業の発展期(1815-1870年)のあいだは、いつでも、恐慌の**前**の最後の繁栄期の最高限が、次にくる繁栄期の最低限として再現し、それからまたそれよりもずっと高い新たな最高限に上がって

行くということである。」という文章から、不破さんはとんでもない勘違い、あるいは、マルクス経済学と科学的社会主義の思想の修正を行ないます。

二一世紀になってニセ「恐慌の運動論」を発見した不破さんは、『前衛』2013年12月号で、マルクスが、「恐慌は、利潤率の低下の法則とは関係がなく、資本主義が循環的に運動してゆく一局面であること、一回ごとに資本主義の危機が深まるわけではなく、恐慌は、前よりも高い所で経済的發展が進む新しい循環の出発点になる」という資本主義観の大転換をしたと述べて、マルクスの経済学と科学的社会主義の思想の大修正を行ないます。

不破さんは、「恐慌は、利潤率の低下の法則とは関係がない」といい、恐慌によって「資本主義の危機が深まるわけではなく」、恐慌は「前よりも高い所で経済的發展が進む新しい循環の出発点になる」と言っ、「産業循環」を通じて深まっていく「資本主義の危機」を否定しますが、この不破さんの経済と社会の見方は、『資本論』で論及されているマルクス・エンゲルスの経済学と科学的社会主義の思想とを真っ向から否定するものです。不破さんが援軍を仰ごうとする大谷氏も不破さんのこのような考えをキッパリと否定しています。詳しくは、後の「第三〇～三二章」にかかわる大谷氏の論及と青山の若干のコメント」の「・第三〇～三二章に関しての大谷氏の考え・意見」の「Ⅲ」に登場する11個の基本的なターム」の「(7)産業循環」(P251-275)」を参照して下さい。

「恐慌」と「利潤率の低下の法則」との関係についていえば、不破さんが「古い地層」として切り捨てた第三部第三篇を除外して『資本論』を一瞥しただけでも、「利潤率の低下の法則」のもとでの利潤率の変化が「産業循環」の各局面に作用し、「産業循環」形成の要因の一つになっていることは明らかです。

また、「第二七章」で、信用が社会的生産諸力と社会的生産の発展という「新たな社会の形成要素」の発展と「古い生産様式の解体の諸要素を促進する」といことが述べられていますが、「産業循環」の最終局面である恐慌によってそのことが白日の下にさらされ、「資本主義の危機が深まった」ことが明らかになり、繰り返される「信用」の発展と「恐慌」の繰り返しのなかで、「資本主義の危機」はますます深まっていくのです。だから、二一世紀のいま、2020年の「ダボス会議」の討論会で、「我々の知っている資本主義は死んだ」という声が普通に聞こえてくるのです。

資本主義発展論者になった不破さんの“危機”への鈍感力

しかし、「一回ごとに資本主義の危機が深まるわけではない」、恐慌は「前よりも高い所で経済的發展が進む新しい循環の出発点になる」などとノー天気なことを言っ「資本主義の危機」を見ることのできない、不破さんの「鈍感力」は、リーマン・ショックが起きたときに、『架空の需要』にもとづく生産の無制限的拡大とその破綻という過程が典型的に現われていた」などと言い張って、二一世紀になって自ら作ったドグマで現実の「資本」の動きを覆い隠し、ブルジョア経済学でさえ「100年に一度の危機」と色を失った資本主義の“危機”に際し、何事もなかったかのように平然と構えています。この何にも認識できない「現状認識」に基づいて、不破さんの強い影響力のもとにある「共産党」は、グローバル資本の行動とそれと並走する「架空資本」にはまったく対峙しない「暮らし応援の経済成長戦略」などという、資本主義擁護政党が国民を騙すために掲げるような「政策」を掲げて闘っています。

マルクスと対極にいる人たちさえ“危機”を感じ始めている

100年に一度の危機といわれたリーマン・ショックは、一部御用学者、一部の新自由主義者にも大きな影響をあたえました。たとえば、①言わずと知れた、アメリカで鍛え上げられたバリバリの新自由主義者であった中谷巖氏は、リーマン・ショックの年に出版した『資本主義はなぜ自壊したのか』で、依然として、新自由主義に基づくグローバル資本主義がもたらす害悪を資本主義の本質から出た必然的なものであることを認めようとはせず、日本人の古来からの（?!）考え方、行動様式、ユニークな文化伝統を生かした経済運営に活路を求め、「今こそ、人類は精神革命、価値観の転換を求められている」と言っ、て、完全な観念論者、ユートピア資本主義者に留まっていますが、傍若無人のグローバル資本の行動を見て、資本主義経済を「悪魔の碾き臼」とまで言い、新自由主義に基づくグローバル資本主義を徹底的に批判するまでになっています。②また、野口悠紀雄氏は、これまでの政府自民党の政策を全面否定し、一時しのぎの景気対策を批判し、外需依存・海外依存の経済から内需主導型の経済への転換を求め、それは原理的には可能であるが、政治のリーダーシップが無いから実現できないのだと言います。しかし、残念ながら、自民党の景気対策は資本(財界)にとってはベストの選択であり、国民を犠牲にして外需で儲け、挙げ句の果てに日本がミイラ化しているのは、まさに資本主義の「原理」に基づくもので、資本の「さが」によるものであり、資本主義の世の中は氏の頭の中で作り上げられた「原理」によって動くものではないということを野口氏は理解しようとはしません。③そして、大前研一氏は、ブルジョア経済学の手法が破綻したことを認めて、日本の現況は縮み志向のためであるとし、消費者をその気にさせる「心理経済学」が必要で、需要と市場の変化を見て鉅脈を見つけることを説きます。国の目的は「『経済のパイを大きくして国民生活を豊かにする』こと、すなわち『すべての人のグッドライフ(充足感や充実感のある人生)のため』である」とし、「『増税』『税金財源』『外国頼み』は全部ダメ」だと言い、「国民にグッドライフを届ける」ために地方債を発行して都市の再開発を行なうことと、個人は、団塊世代の使える退職金60兆円を使ってグッドライフを楽しめと言います。しかし、大前氏は、「縮み志向」になぜなったのか分からないから、「外国頼み」は「ダメ」だと言うが、企業は新興国や途上国へ出ること、海外に活路をみだし、早く海外に出ることを勧める始末です。困ったもんだが、日本が「縮み志向」であると認識しているだけでも、不破さんよりはましなのかもしれない。

以上、リーマン・ショック前後の、三人の資本主義の擁護者たちの考えを大ざっぱに見てきましたが、ここで肝心なのは、三人とも、「現在の日本は『たちいかない状況』になっており、支配階級(資本)には解決する能力がない」と認識していること、そう認識せざるを得ない状況に日本があるということです。

そして、リーマン・ショックは、日本の金融機関には幸い深刻な影響を与えませんでした。製造業に深刻な影響を与え、「産業の空洞化」した日本経済に大きなダメージを与えて、資本主義の擁護者たちの一部にもグローバル資本が支配する現代の資本主義を「たちいかない」ものと思わせるまでに「資本主義の危機が深まった」ことを示しました。

矛盾を見ることのできない不破さんの「資本主義発展論」

国民大衆がラディカルに政治・経済・生活をつかむ貴重なきっかけの時期である「危機」のときに、「一回ごとに資本主義の危機が深まるわけではない」などといって自らの任務を放棄し、「『架空の需要』にもとづく生産の無制限的拡大とその破綻という過程が典

型的に現われていた」などとトンチンカンなことを言って、政府に「暮らし応援の経済成長戦略」への転換を求めて、こと足れりとする。これでは「前衛党、失格だ。

そして不破さんは、マルクスが恐慌を経て資本蓄積が進み生産力が向上することを述べると、恐慌は「前よりも高い所で経済的發展が進む新しい循環の出発点になる」とマルクスが言ったとあって、恐慌が「資本主義の危機」をリセットして資本主義の経済的發展をはかるための出発点でもあるかのように言います。「生産力の向上」と「資本主義の発展」を資本主義の永続性に読み替えてしまいます。マルクスは、恐慌を経て資本蓄積が進み生産力が向上することを述べましたが、恐慌が「資本主義の危機」をリセットするなど考えたことはありません。「一回ごとに資本主義の危機が深まるわけではない」と「資本主義の危機」をわきにおいて、「前よりも高い所で経済的發展が進む新しい循環の出発点になる」などと言うことは、手放しの「資本主義発展論」です。

不破さんの「資本主義発展論」は伝言ゲームで花開く

この「資本主義発展論」を一層発展させているのが、『前衛』誌上等で不破さんの著書の宣伝のための鼎談に、不破さんの「介さん」「角さん」の一人として出ている石川康宏氏です。

石川氏は「資本主義発展論」に立って、一步前に進みます。石川氏は、マルクスは「労働者の闘いの前進を」、「より巨大な資本主義の発展をもたらす要因としてとらえました」と言って、資本主義社会の墓堀人である労働者を、「より巨大な資本主義」を「発展」させるためのアシスタントにしてしまいます。そして、「こうした闘いの積み上げとそれを乗り越えようとする資本による生産力の発展は、直接には資本主義の枠内における資本主義の改良や変化を生み出すものですが、同時に、マルクスはそれを、未来社会を手前に引き寄せる新しい歴史的条件のけいせいとしてとらえました」と言います。「生産力の発展」と「資本主義の発展」を資本主義の永続性に読み替えて伝えた不破さんの「伝言」が見事に花開きました。この「未来社会を手前に引き寄せる新しい歴史的条件のけいせい」なるものには、「古い社会の変革契機」が抜け落ちています。

まったく、恐れ入ります。昔、「民社党」という政党がありました。マルクスをこんな姿に修正した石川氏は、不破さんと並んで「民社党」の理論的指導者になれること、間違いありません。

石川氏が言っていることの本当の意味

私は、「第二七章」のところで、マルクスは、「新たな社会の形成要素」として「社会的生産諸力と社会的生産の発展」を捉え、「古い社会の変革契機」として「私的資本主義的生産をもたらす様々な矛盾と労働者階級の運動の前進」を捉えていたことを紹介しました。石川氏には「マルクスのかじり方」というようなタイトルの著書がありますが、石川氏は、「こうした闘いの積み上げ」とか「資本による生産力の発展」とかいう言葉を散りばめて、「未来社会を手前に引き寄せる新しい歴史的条件のけいせい」という何となくマルクスが言っているようなゴールにたどり着き、なんとなくマルクスを「かじった」かのように見せます。

しかし、マルクスが言っていることと石川氏が言っていることは、似て非なるものどころか、まったく違います。

石川氏の言う、「こうした闘いの積み上げとそれを乗り越えようとする資本による生産

力の発展」という文章は、——「労働者の闘いの前進」が「より巨大な資本主義の発展をもたらす要因」なのだから——「こうした闘いの積み上げ」はより一層「より巨大な資本主義の発展をもたらす要因」となり、「資本による生産力の発展」はさらに「それを乗り越える」という、スーパー「資本主義発展論」であり、それが、「資本主義の改良や変化を生み出す」と言うのです。そこには「古い社会の変革契機」などありません。「こうした闘いの積み上げとそれを乗り越えようとする資本による生産力の発展」という意味不明な奇妙な文章の意味は、「資本による生産力の発展」によって労働者の「こうした闘いの積み上げ」を「乗り越える」という意味のようです。「資本主義発展論」もここまでくると、「お見事!!」としか言いようがありません。

ところで、本来、「こうした闘いの積み上げとそれを乗り越えようとする資本による生産力の発展」という「文章」は、まったく文章になっていません。真実をつかんでいません。「こうした闘いの積み上げ」は「乗り越える」ものではありません。「こうした闘いの積み上げ」た成果は、経済的には搾取の度合いを軽減するもので、資本家からみれば利潤率を低くするものです。この労働者の成果を奪うものは、不破さんが無視した「第一四章」で述べられている「利潤率の傾向的低下の法則」に「反対に作用する諸原因」です。それを「乗り越える」などという言葉でごまかしてはいけません。そして、労働者はごまかされてはなりません。労働者はこの「反対に作用する諸原因」をしっかりと見抜き、それと闘わなければなりません。「生産力の発展」と利潤率を低くするマルクスのいう「反対に作用する諸原因」とを混同すると、ラダイトになってしまいます。

石川氏が、本当に科学的社会主義の思想の学徒であるならば、他人に「マルクスのかじり方」を説教するまえに、もう一度ゼロからマルクス・エンゲルス・レーニンの著作を学び直すことをお勧めしたいと思います。まだ若いのですから。

※石川氏の謬論の詳しい内容は、[ホームページ 4-22-2](#)「☆石川康宏氏は、唯物史観を認識の中心に据えるべきではないのか(その2)」を、是非、参照して下さい。

資本主義の見方も、革命の見方も変わった不破さんの「変身」

このように、「資本主義発展論」に立った不破さんは、「ここでは、もう資本主義の見方も、革命の見方も変わっているのです」とマルクスを修正し、『賃金、価格、利潤』の要点の修正から始まって、日本共産党の毛沢東盲従一派との闘いの輝かしい歴史すら修正してしまいます。

※詳しくは、[ホームページ 4](#)「不破さんの思い違い」の各ページを、是非、ご覧下さい。

「第三二章 貨幣資本と現実資本Ⅲ(結び)」の概要

貨幣資本の蓄積方法と産業資本家と貨幣資本家

「収入のうち消費に向けられている部分の膨張はさしあたりは貨幣資本の蓄積として現われる」が、貨幣資本の蓄積は、このほかに、大もうけをして再生産から引退する一群の人々の余剰資金を含む、すべての余剰資金によって行なわれます。「つまり、貨幣資本の蓄積には、産業資本の現実の蓄積とは本質的に違った一つの契機がはいるのである。」(P647)のです。

「産業資本家の資本は彼自身によって、『貯蓄』されるのではなく、彼は自分の資本の大きさに比例して他人の貯蓄を自由に使うのである。」「資本主義体制の最後の幻想、すなわち、資本が自分自身の労働や貯蓄の生みの子でもあるかのように思う幻想も、これで

砕かれてしまう。」「他人の所有物を貨幣資本家が産業資本家に用だて、そのかわりに今度は前者が後者を搾取するのである。」「再生産する資本家たちの一方の部分から貨幣を借りる銀行業者が、再生産する資本家たちの他方の部分にその貨幣を貸し、そこで銀行業者が福の神として現われ、それと同時に、この資本の処分権はまったく仲介者としての銀行業者の手に握られてしまうという形態」が現れる。(P649-650)

素材的富の増大につれて、貨幣資本家の階級は大きくなり、利子付証券、国債証券、株式などを思惑取引する証券仲買業者が貨幣市場で主役を演ずるようになる。「オーヴァーストーンは、貸付資本は資本一般と同じだという彼自身の仮定と抜けめなくごちゃまぜにして、そうすることによって、高利貸を唯一の資本家にし、高利貸の資本を唯一の資本にしておもうとするのである。」(P659-660)

貨幣資本の過剰

再生産過程の拡大のための部分が貨幣資本に転化するのには、①「この部面が資本で飽和しているということ」または、②「資本として機能できるようになる」大きさに達していないためであるが、「諸生産部門の過度充満や貸付資本の過剰供給が生ずる」ような、「貸付可能な貨幣資本の過多が示すものは、**資本主義的**生産の制限以外のなにものでもない。」「貨幣資本そのものの過多は必ずしも過剰生産を表してはいないし、資本の充用部面の不足をさえも表してはいない」。(P648)

「現実の蓄積からは独立したものでありながらしかもそれに伴って現れる諸契機によって、貸付資本の蓄積が拡張されるという理由からだけでも、循環の一定の段階では絶えず貨幣資本の過多が生ぜざるをえない」し、「同時に信用の発達につれて生産過程をその資本主義的制限を乗り越えて推進することの必然性、過剰取引や過剰生産や過剰信用が発展せざるをえない」。「これはまた、つねに、ある反動を呼び起こすような形で起こらざるをえない」(P649)

利子率

利子率がかなり長い期間にわたって高いとすれば、それは、一見して明らかに、この期間をつうじて利潤率が高いということの証拠ではあるが、しかし必ずしも企業者利得の率が高いということを証明してはいない。高い利子率は、利潤によってではなく、投機によって、借り入れた他人の資本そのものによって支払うことができる。また、資金が逼迫しているときも、産業資本にたいする資金需要がふえて、利子率も高くなる。

「労働力にたいする需要の増大につれて、可変資本にたいする需要、したがってまた貨幣資本にたいする需要も増加することはありうるのであって、これはまた利子率を高くすることができるのである。その場合には労働力の市場価格はその平均よりも高くなり、平均よりも多数の労働者が雇用され、またそれと同時に利子率も上がる。」(P657)

「ある商品の供給が平均よりも減って、しかも貸付資本にたいする需要は増大するということもありうる。なぜそれが増大するかといえば、価格がもっと高くなることを見越して思惑が行なわれるからであり、また、価格を高くする最も手近な手段は、供給の一部をしばらく市場から引きあげておくことだからである。利子率は、このように市場への商品の供給を人為的に妨げようとする試みによって、高くなることもありうる。」(P659)

逼迫期の貨幣資本と商品と恐慌

「労働の**社会的**性格が商品の**貨幣定在**として表れ、したがって現実の生産の外にある一

つの物として現れるかぎり、貨幣恐慌は、現実の恐慌にはかかわりなく、またはその激化として、不可避である。」(P661)

「逼迫期には、貸付資本にたいする需要は支払手段にたいする需要であって、それ以上のなにもものでもなく、けっして購買手段としての貨幣にたいする需要ではない。」「信用が収縮するかまたは止まってしまう逼迫期には、にわかに貨幣が、唯一の支払手段、価値の真の定在として、絶対的に諸商品に対立するようになる。」(P660-661)

恐慌に見舞われると、支払手段としての商品は投げ売りされ、「利率は上がり、信用は解約を予告され、有価証券は下落し、外国有価証券は投げ売りされ、この減価した有価証券への投下に外国資本が引き寄せられ、最後に破産がやってきてそれが大量の債券を清算してしまう。」(P663)

オーヴァーストーンの誤り

オーヴァーストーンは、「利率を規定する貨幣資本の需要供給」と「現実資本の需要供給」とは同じだと主張し、1844年の銀行法で逼迫の時期に銀行券の発行を抑えた。ウェゲリンは「利率は『遊休資本の量』によって規定されているのであり、それは『ただ投下を求めている遊休資本の量の一指標でしかない』という。」(P663-664)

現代の私たちが留意すべき点

マルクスは、「労働の社会的性格が商品の貨幣定在として表れ、したがって現実の生産の外にある一つの物として現れるかぎり、貨幣恐慌は、現実の恐慌にはかかわりなく、またはその激化として、不可避である」と言っていますが、資本主義的生産様式は商品生産の基礎の上に成り立つことによって、あらゆるものを「商品」にし「貨幣定在」にします。そして、資本主義の発展とともに「貨幣資本」も増大していきますから、恐慌の前の繁栄期には不動産を中心とする高額な「商品」はより高額になり、庶民ですら「借り入れた他人の資本そのもの」によって資産を形成して消費を拡大し、実体経済を拡大して「繁栄期」を謳歌します。(このことについては、「第三三章」P685でも触れられています。)それが崩壊したのが「リーマン・ショック」です。不破さんは、産業循環のほんの一部にしがみついて自論を展開するのをやめて、現実を直視すべきです。

またこの「章」では、「労働力にたいする需要の増大」の効果が述べられていますが、私が「しつこく」日本経済の空洞化と「健全で「単純な」(!)常識の騎士たち」の「賃金を上げれば景気はよくなる」というグローバル資本の行動を見ない謬論を「口撃」しているのは、このことに根拠があります。「第30章」の「労働者たちの消費能力は、一方では労賃の諸法則によって制限されており、また一方では、労働者は資本家階級のために利潤をあげるように充用されうるかぎりでしか充用されないということによって制限されている。」(P619)という文章も、もう一度、思い出して下さい。そして、「日本経済の空洞化」を回復することは、労働者階級だけでなく、グローバル資本以外のすべての者にとって利益になります。

「第三〇～三二章」にかかわる大谷氏の論及と青山の若干のコメント

・第三〇～三二章に関しての大谷氏の考え・意見

大谷氏が「解題」で述べていること

大谷氏は、『マルクスの利子生み資本論3』の「解題」で第三〇章から三二章までの「章」

立てについて、MEGA 版編集者の考証を検証しながら、エンゲルスの編集を肯定しています。(『マルクスの利子生み資本論 3』P199~202、以下この本るときはページ数のみ表記します。)

しかし、大谷氏は、「第三〇~三二章」について、「エンゲルスによる編集作業というスクリーンを通して」マルクスの第 3 部第 1 稿を見ていたが、「そのスクリーンがぶ厚い不透明なものであった」と言い、草稿には「マルクスの本当の姿がある」(P203)と言います。

そして、大谷氏は、草稿は「筋を追いつつすらすらと読めるものではない」ので、まず「3 若干の基本的なタームについて」で、「Ⅲ」に登場する 11 個の基本的なターム(専門用語——青山)を取り上げ、……、マルクスがそれらのタームをどのように使っていたか、を見ておく。……そのうえで、次の 4 で、マルクスが「Ⅲ」のなかでどのような内容の記述を行なっているか、ということをも 16 個の論点について見ることによって、「Ⅲ」で明らかにされていることの全容をつかむように努めることにしよう。」(P203)と「解題」の趣旨を述べています。

「Ⅲ」に登場する11個の基本的なタームについて

「(1) monied capital」(P204-209)

それではまず、「専門用語」「(1) monied capital」から、見ていきましょう。

大谷氏は P205 で、「Ⅲ」のテーマが① monied capital と生産的資本の蓄積との関係と② monied capital と生産的資本の蓄積との関係と国内にある貨幣量との関係の論究にあることを述べます。そして、「草稿で monied Capital または moneyed Capital となっているところのほとんどをエンゲルスが『貸付資本』に変更していたのである。」と言います。

そして、「monied capital とは」、銀行業者から「利子生み資本として貸し出される、貨幣形態にある資本である。」と言います。

「(2) monied capital と利子生み資本」(P209-215)

大谷氏は、P211 で、マルクスにあっては、「利子生み資本」と「monied capital」とは同じ意味である、と同時に、違うと言い、P214 で、文脈の中でつかめと、至極もつともなことをいいます。

なおここで、大谷氏と三宅義夫氏との「草稿第五章」の構成をめぐる意見の相違のことが書かれていますので、ばかばかしい話ですがここで触れておきたいと思います。

その「論争」とは、三宅氏の「第 3 部第 5 篇は大別して第 21 ~ 第 24 章では利子生み資本についての一般的説明が与えられ、第 25 章以下では信用制度が論じられている」という「理解に異を唱え」(P214)、大谷氏が「第 25-35 章の部分のうちの本論のあたる」ところでは、「信用制度」が対象となっているのではなく、信用制度下での利子生み資本すなわち monied capital が対象となっているのであり、そこでは「利子生み資本が信用制度のもとでとる諸姿態の分析」が行なわれている、と主張した」のに対し、三宅氏が「利子生み資本が信用制度のもとでとる諸姿態の分析」とは信用制度論にほかならないのであって、そのことに大谷は気づいていないだけのことなのだ」(P404「[補論] 三宅義夫氏の大谷批判の一部について」)と言ったというものです。

学者らしいといえば学者らしいのかもしれないが、マルクスから資本主義的生産様式の社会での経済の動きを学び資本主義社会を克服する術を真剣に論究しようとするものにと

って意味のない「論争・議論」です。こんなことをしていたのでは、資本主義社会を克服することなどできない。そのような意味も含め、「〔補論〕三宅義夫氏の『大谷批判の一部について』」の紹介と論評は割愛します。

「(3) monied capital と貨幣資本(Geldcapital)」(P215-223)

まず、はじめに、monied capital と Geldcapital との違いについて、大谷が「資本の循環形態としての貨幣資本にはほとんど Geldcapital というドイツ語のタームが使われている」と述べたのに対し、川波洋一氏が、Geldcapital には「貨幣財産としての貨幣資本」という意味もあると異論を唱えたことが述べられる。

その中で大谷氏は、「なんらかの意味において貨幣形態にある資本、あるいは貨幣として見られた資本は『貨幣資本(Geldcapital)』と呼ばれうる」のであり、「貨幣財産としての貨幣資本」も「資本の循環形態としての貨幣資本」も、そして「monied capital でさえも『貨幣資本(Geldcapital)』なのであって、マルクスはしばしば、monied capital と言ってよいところで『貨幣資本(Geldcapital)』という語を使っている。」と、大谷氏としては、——なんのために Geldcapital を「資本の循環形態としての貨幣資本」と概念を狭めたのか意味がなくなり——元も子もないことを口走ったうえで、「moneyed Capital と言え、基本的には『貸付可能な貨幣資本』を指すことになっている」と言います。

そして、大谷氏は 1984 年には、エンゲルスが「ドイツ語での印刷用原稿を作るためにはやむをえなかったことではあるが—— monied Capital 等々も、ドイツ語(Geldcapital)に訳して統一した。そのために原文のニュアンスが失われている場合もあるように思われる。」(P221)とまで言っていたのが、この本(2016 年)では、『貨幣資本と現実資本』の三つの章の場合、ここでエンゲルスがやったのは、monied Capital を Geldcapital に置き換えることではなくて、monied Capital の大部分を『貸付資本 [Leihkapital]』に変更し、ただ一部を Geldkapital と独訳した」とコッソリと訂正していますが、その場合の「ニュアンス」の失われ方については論及していない。

大谷氏は、「(1) monied capital」で「草稿で monied Capital または moneyed Capital となっているところのほとんどをエンゲルスが『貸付資本』に変更していたのである。」とエンゲルスの編集に問題があるかのように言っていますが、エンゲルスは「monied Capital 等々」を、草稿の内容を損なわずなるべくわかりやすくなるよう臨機応変に、「貨幣資本」、「貸付可能な貨幣資本」、「貸付資本」、「貸付可能資本」、「自由に利用できる貨幣資本」と表現しています。より詳しくは後で見ます。

なお、「(3) monied capital と貨幣資本(Geldcapital)」のほぼ全部が大谷氏と川波氏の——『資本論』をちゃんと読めばそれで理解できる——どうでもいいような論争と大谷氏の 1984 年の主張の訂正で終わっています。

マルクス経済学を研究する学者が古典文学の学者のようなことをやっていたのでは、資本主義的生産様式の社会を変えることなどできるはずがありません。マルクスから学んだことをもとに、「貨幣」がなぜ「貨幣資本」になるのか、「貨幣」から「資本」的性格をなくすには社会と企業と国民と国家の係わり方はどうあるべきか等を探究することこそがマルクス経済学を研究するものの社会的使命のはずです。残念でなりません。資本主義的生産様式の社会の暴露がしっかり行なわれていれば、「ルールある資本主義」などを目標とすることの馬鹿さ加減がよくわかるはずです。

「(4) 貸付可能な資本あるいは貸付可能な貨幣資本」(P223-237)

大谷氏は、草稿の「Ⅲ」のなかで「貸付可能な資本(loanable Capital)」という言葉と「貸付可能な貨幣資本(loanable monied Capital)」という言葉を使っている文章を「引用」し、次に、「Ⅰ」と「Ⅱ」のなかで「貸付可能な資本(loanable Capital)」という言葉が使われている例を示したあと、「貸付可能(loanable)」である資本は、特別な場合を除いて、貨幣形態にある資本だから、それは「貸付可能な monied Capital」にほかならない」と言い、「そのかぎりでは」と言って、「貸付可能な」という限定のついていない「monied Capital」のほうが「貸付可能な monied Capital」より「上位概念」であるという見事な「論理展開」をし、文章を3例「引用」して、「貸付可能な monied Capital とは、このような広義での monied Capital のうち、とくに、貨幣市場で需要に対する供給として現われ、したがってまたその量(供給量)が利子率に作用する、という姿態をとっている monied Capital である。」(P233)と、見事な結論づけを行ないます。

しかし、大谷氏が例に挙げた文章のなかに出て来る「monied Capital」という言葉は、「monied Capital」の可能性に着目したり、「monied Capital」が転化したものという点に着目したりして、あえて「monied Capital」という言葉を使っているもので、広い意味で「monied Capital」であると定義付けしているものではありません。「貸付可能な monied Capital」と「monied Capital」とは同義語なのです。だから、大谷氏も、10 ページにもわたって論証してきた見事な結論に続けて、「けれども、「Ⅲ」で『貨幣資本』の量の増減と『現実資本』の拡大・停滞との関連を問題にするさいの monied Capital の量とは、まさにこのような意味での貸付可能な monied Capital のことである。」と言わざるをえないのです。

続けて大谷氏は、「貸付可能な資本」の概念が、すでに『1861-1863年草稿』のなかで確定されていたことを例を挙げて述べ、「この『貸付可能な資本』という語そのものは、すでに1852年にマルクスによって使われていた。」と述べて、1852年11月1日付の『ニューヨーク・デイリ・トリビュン』のマルクスの有名な論説を紹介し、「英語圏で普通に使われていた」「貸付可能な資本」という言葉をマルクスが「みずからの理論的概念に仕上げた」ことを述べます。

「(5) 現実資本、実物資本、再生産的資本」(P237-242)

大谷氏は、草稿での「現実資本」と「実物資本」の使用例を挙げたあと、エンゲルスが草稿の「生産的資本」(約30回)の約3分の2を「産業資本」に変更したことをとりあげ、マルクスの「生産的資本」には「生産過程で価値増殖しつつある資本」という意味を表している場合と「貨幣資本・生産的資本・商品資本という形態を絶えずとって運動する資本すなわち産業資本」という意味を表している場合とがあり、エンゲルスは両者を「はっきりと言い表したかったのであろう」が、「マルクスが『生産的資本』というタームを使っているすべての場合に、多かれ少なかれ共通の意味内容が含まれていて、それらをすべてこの二つのどちらかに分けることができるかどうか、疑問なしとしない。」と疑問(?)を呈しています。

私は、この大谷氏の「疑問」に大いに疑問を呈します。マルクスの言う「生産的資本」が、「生産的資本」をいう場合と「産業資本」をいう場合とがあるならば、分かりやすく編集するのは編集者として当然のことで、約(?)30回の「生産的資本」という言葉の約(?)3分の2を「産業資本」という言葉にした編集のなかに問題があるならば、具体的に指摘

すべきで、「それらをすべてこの二つのどちらかに分けることができるかどうか、疑問なしとしない」というのでは、あまりにもお粗末で、「ヤクザが因縁を付けている、かのよう」に思われてもしかたがないのではなんでしょうか。

続けて大谷氏は、「この『実物資本』すなわち『生産的資本』および『商品資本』はまた、次のように、『再生産的資本』とも呼ばれている。」として、五つの文章を例示していますが、「現実資本」＝「実物資本」＝「産業資本」＝「再生産的資本」の構成要素として「貨幣資本・生産的資本・商品資本」という諸形態があるということです。

最後に大谷氏は、「だから、monied Capital と「実物資本」ないし「再生産的資本」との関連とは、monied Capital と、「実物資本」ないし「再生産的資本」が経ていく過程との関連にほかならない。」という「名言」でこの項を結んでいます。

「(6) 再生産過程における現実の蓄積と蓄積ファンドの積立」(P242-251)

大谷氏は、マルクスが「Ⅲ」のなかで、「再生産過程のところで見たように」と書いているところから、『資本論』第2部第1稿を検討し、「第五章「Ⅲ」」のなかで『現実の蓄積』または『現実の蓄積過程』という語でマルクスが表象していたものは、社会的総生産物のうちの一部が追加不変資本および追加可変資本として生産過程に前貸され、生産過程が拡大していくこと、という程度のものであったのであろう。」と言います。

次に、大谷氏は、「蓄積ファンドの積立あるいはそれに関連するものとみなしうる貨幣蓄積だけを見ることにしよう。」として、再生産的資本家の当面使い道のない貨幣が銀行業者のもとで monied Capital を形成する、二つの文章をとりあげます。

これらから、大谷氏は、「以上が、「Ⅲ」」のなかで、現実の蓄積すなわち拡大再生産にかかわる『貨幣資本の蓄積』についての言及のすべてである。」と言い、第2部第1稿の第3章で予告した『詳細な考察』をまったく行なわなかったのである。」と言って、この時点でマルクスが「蓄積ファンドの積立および投下」と「固定資本の償却基金積立と更新」など頭になかったと言います。

しかしマルクスは第 32 章で、再生産過程の拡大のための部分が貨幣資本に転化するのは、「資本として機能できるようになる」までの間であること、つまり、「蓄積ファンドの積立および投下」を言っており、「固定資本の償却基金積立と更新」を前提として再生産過程の拡大のための部分について言っているのだから、この時点でマルクスが「蓄積ファンドの積立および投下」と「固定資本の償却基金積立と更新」など頭になかったというのは事実誤認です。

「(7) 産業循環」(P251-275)

「monied capital と再生産的資本との関連を、現実の資本の運動のなかでとらえようとすれば、それは否応なしに、産業循環の諸局面における現実資本の蓄積ないしその停滞と monied capital の増減との関連を明らかにすることとならざるをえない。だからこそマルクスは、この「Ⅲ」では、産業循環とその諸局面とを取り上げないわけにはいかなかったのである。」(P252)

なお、大谷氏が Google Books で検索したところ、「1865 年以前には、『商業循環 [commercial cycle]』という語は使われていても、『産業循環 [industrial cycle]』という語は、イギリスでもアメリカでも、実業界でも経済学の文献でも、ほとんど使われていなかったようである。だから、マルクスが始めて、commercial cycle という語の commercial を

industrialに変えたindustrial cycleという語を積極的に使い始めたと言ってもよいのかもしれない。マルクスが『産業循環 [industrieller Zyklus]』という語を活字にした最初のもは、エンゲルスとの連名で『新ライン新聞』第5・6冊、1850年5月-10月、に掲載した『評論、[1850年] 5月-10月』のようである(MEGA 1/10, S. 455)。(P254)とのことである。

なお、ここで、大谷氏は、第3部第1稿の「第3章 資本主義的生産が進行していくなかで一般的利潤率が傾向的に低下していくという法則」について、「マルクスはここで、利潤率の傾向的低下の法則を明らかにしているが、さらに進んで、『資本主義的生産が進行していくなかで』、すなわち資本の蓄積が進んでいくなかで、この法則がどのように作用し、資本をどのように運動させることになるのか、ということ考察する。そしてこのなかで、資本の諸矛盾の累積が、ある時点でこれらの矛盾を爆発させて、恐慌をもたらすことを明らかにしたのである。」(P259)と述べていますが、これは不破さんの「利潤率の傾向的低下の法則」の評価とは正反対であり、不破さんの「恐慌の運動論」とも考えを異にします。そして、大谷氏は、「なお、念のために述べておくと、マルクスは第3部第1稿第3章を書いたのち、第2部第1稿を書き、その後ふたたび第1稿の執筆に戻ったが、第1稿第5章を書きつつあった時点で、第1稿第3章で明らかにしていた一般的利潤率の傾向的低下の法則そのものについての論証を依然として正しいものと考えていたこと、言い換えれば、そこでの論証を不十分なものだったと反省して取り消すべきだと考えてはいなかったことは、第5章のなかの次の四つの記述を見れば明らかである。これはエンゲルス版第15章部分についても妥当することであろう。」(P275)と述べて、不破さんの暴論をきっぱりと退けています。

※不破さんの『資本論』第三部の「利潤率の傾向的低下の法則」(第13章～第15章)に関する詳しい説明は、[ホームページ 4-27-3 「エセ「マルクス主義」者の『資本論』解説\(その3\)『資本論』第三部を読む」](#)を検証する。(1/3)の [PDF ファイル 16 ページ 「第三篇」](#)の意味をまったく理解できない不破さん」以下を参照して下さい。

「(8)資本のプレトラ」(P276-297)

マルクスの言う「資本のプレトラ」とは、——「いわゆる資本のプレトラ(この表現は、つねに monied Capital について用いられるものである)」(P276)とは、「つねに本質的に、利潤率の低下が利潤量によって埋め合わされない資本(そして新たに形成される資本の若枝はつねにそうである)のプレトラのことを言っている」(P266)のであり、「資本の一時的な過多」(P278)——のことです。

大谷氏は、「マルクスは『1861-1863年草稿』でも第3部第1稿第15章部分でも、『資本のプレトラ』とその概念的把握である『資本の過剰生産』を論じるとき、信用制度を、したがってまた、そのもとで利子生み資本がとる独自の形態である monied Capital をほぼ完全に捨象したことによって、『資本のプレトラ』として現象する再生産的資本の過剰生産とはなにか、ということ明確に把握できたのである。」という。

なお、第15章でマルクスは、「過剰生産」の「二つの形態」の「相互の関係」の論究は、「利子生み資本などや信用などが展開される資本の現象する運動に属する」と述べています。

「(9)貨幣の量」(P297-303)

大谷氏は、「マルクスは冒頭で、monied Capital と貨幣量との関連について問題を立てながら、「Ⅲ」のなかでは、——青山補足)それについては立ち入って論じることをしていなかったように見える。」と言い、「そこでエンゲルスは、第 30-32 章では残されたままになっていると彼が考えた問題、つまり、monied Capital と貨幣量との関連の問題についても当然に第 5 篇で論じられなければならないと考え、「『混乱』および『混乱。続き』のなか」と「Ⅲ」から抜き出したわずかの部分を加えて」、第 33 章と第 34 章を「まとめたのであった。」(P297-298)と言います。

「(10)商業信用と貨幣信用」(P303-308)

大谷氏は、第 25 章ではマルクスは「商業信用」という言葉で「公信用」とは区別される「私的信用」一般を指していたので、エンゲルスは「商業・銀行業者信用」という言葉に置き換えたが、第 30 章ではマルクスは「商業信用」という言葉で「再生産に携わる資本家が互いに与え合う信用」(P433)の意味で使うと言っていることを述べます。

しかしマルクスは、上記のエンゲルスの言う「銀行業者信用」とは区別された「商業信用」と生産的資本との関係を述べたあと、「ところが、いま、この商業信用に本来の貨幣信用(monied Credit)がつけ加わる。産業家や商業家どうしのあいだの前貸が、彼らにたいしての銀行業者や貨幣貸付業者からなされる貨幣の前貸とが混ぜ合わされる。」(P446)と述べて、「商業信用」が第 25 章での「商業信用」という言葉の意味に拡大されます。

なおここで、大谷氏は、エンゲルスが広義の「商業信用」を「商業・銀行業者信用」と言い換えたこととの統一性を考えて、マルクスが「貨幣信用」といっているところを「銀行業者信用」または「銀行信用」と言っていることについて、マルクスは第 25 章で「銀行信用」という言葉で「預金」のことを言っているから、「銀行業者信用」という言葉は使わず「マルクス自身の用語法に即して」、「貨幣信用」という「タームを用いるべきだ」と考える。」と言います。どちらが理解しやすいか、皆さんの判断に任せます。

「(11)信用システムと信用制度」(P308-318)

大谷氏は、「マルクスにあっては、この両語(信用システム [Creditsystem] と信用制度 [Creditwesen] のこと——青山)がほとんど区別なく使われているように見える場合も少なくないが、しかし、明らかにそれぞれ異なったニュアンスをもって使われていると見られる場合も多くある」(P308)と言う。

大谷氏は、「Ⅰ」－「Ⅲ」でマルクスが論じようとしたのは、けっして信用制度そのものではなくて、monied capital すなわち信用制度のもとでの利子生み資本であった」と言う。

この「項」に関しての三宅義夫氏との意見の相違に関しては、「(2)monied capital と利子生み資本」(P209-215)」を参照して下さい。マルクスから資本主義的生産様式の社会での経済の動きを学び資本主義社会を克服する術を真剣に論究しようとするものにとっては意味のない「議論」であることだけは、重ねて申し上げておきます。

「Ⅲ」のなの16個の論点(P319-410)

大谷氏は、「Ⅲ」について、「マルクスは、冒頭で設定された問題に答えるだけでなく、それに関連する、あるいはそれとは直接にはかかわりのない、多数の論点について見過ごせない重要な指摘を行なっているのである。……そこでここでは、この「Ⅲ」でマルクスが述べていると考えられる重要な理論的内容を叙述の実際の進行から切りだし、論点別

に集めてそれらを順次に見ていく、という方法をとることにする。以下、16 個の論点について見ることにしよう。」と、「16 個の論点」を提起します。

「(1) 産業循環の諸局面における **monied capital** の蓄積および **real capital** の蓄積との関連：利潤率の変動と利子率の諸変動」略

「(2) 前の産業循環の最高水準が次の産業循環の土台となる」略

「(3) 現実資本の蓄積とは無関係な貸付可能資本の蓄積」略

「(4) 産業循環と『資本のプレトラ』」

マルクスの言う「資本のプレトラ」とは、「過剰生産と並ぶ一つの特異的な現象」としての「資本の一時的な過多」をも意味している。

「(5) 商業信用 商業信用における『貸付』の意味 信用価格と現金価格の差額」

大谷氏は、マルクスが「手形の期間が普通のそれよりも長い場合だけ」信用価格と現金価格とが異なると述べていることについて、エンゲルスが「このことは私の経験とは一致しない」と補足していることに関し、「エンゲルスの言いたいところが、短期手形でも長期手形でも信用価格と現金価格とは異なっている、ということなのか、長期手形の場合でもこうした違いはない、ということなのか、判然としない。」と言います。

しかし、「割引料」の話をしているのだから、「長期手形の場合でもこうした違いはない」、つまり、「割引料」が付かないなどということは話の筋が通らないし、**事実に基づき常識的に判断しても**、前者であることは明らかで、大谷氏にも理解できることだと思います。

「(6) 信用による貨幣の節約 預金の貨幣機能」略

「(7) 流通貨幣量の法則は銀行券流通の場合にも支配する」

マルクスは、「通貨の量が物価を決定しえないのは、それが商工業の取引量を決定しえないのと同じであろう。その反対に、物価が流通にある通貨の量を決定するであろう。」(P363)と言います。そのとおりです。しかし、通貨量の増大は、不換貨幣の場合貨幣価値を低め資産価格の高騰を招き物価を高めます。

「(8) 貸付可能資本の量と通貨量とはまったく異なる」略

「(9) 貸付可能資本の遊休度を示す銀行の準備ファンドとはなにか」略

「(10) 恐慌期における支払手段の欠乏 貨幣・信用恐慌は不可避である」略

「(11) 銀行の流通手段前貸による恐慌緩和の可能性と資本補填による救済の可能性」

大谷氏は、「マルクスはここでは、恐慌時に銀行に殺到する資金需要にこうした二つの区別されるべきもの(「再生産過程が必要とする流通手段の前貸」と「失われた資本の穴埋めや投機等のための資金需要」のこと——青山)があることを、そしてこの区別の重要性を、明確に把握していた。ただ、彼はまだ、この区別が、資本が流過程に前貸ししなければならない流通手段の前貸と新たに生産過程に前貸される資本の前貸という、再生産過程における二つの前貸の重要な区分にもとづくものであるところまでは明確に把握していなかった。この問題の解明は、1877 年から 1881 年にかけて書かれた第 2 部第 8 稿でようやく成し遂げられることになるのである。」と言う。

しかし、「再生産過程が必要とする流通手段の前貸」と「失われた資本の穴埋めや投機等のための資金需要」とが、どうして、「資本が流過程に前貸ししなければならない流通手段の前貸」と「新たに生産過程に前貸される資本の前貸」となるのか、私には理

解できないし、マルクスもエンゲルスもとっくの昔から理解していることです。

※詳しくは、『反デューリング論』、『資本論』（[ホームページ「5温故知新」](#) → 「1 マルクス・エンゲルスの大事な発見」 → 「H、闘争・団結・未来」の「25-7 分配の資本主義的な性格を剥ぎ取った姿」）を参照して下さい。

「(12)もし国内の生産が組織されていれば、国内は金貨を必要としない」略

「(13)現実の恐慌の究極の原因」

マルクスは、「現実の恐慌の究極の原因」について論及しているなかで、「労働者たちの消費能力は、一部は労賃の諸法則によって、一部は、彼らが資本家階級のために利潤をあげるように充用されうるかぎりではしか充用されない、ということによって、制限されているのである。」と述べていますが、「ルールある資本主義」礼賛論は前者しか視野にないから「賃金が上がれば景気よくなる」などと言って、「ルールある資本主義」をノー天気な礼賛することができるのです。

「(14)恐慌の国際的波及 貿易差額と支払差額」略

「(15)たわごとへの揶揄と混乱への批判」

大谷氏は、「混乱」と「混乱。続き」を取り上げて、「(Ⅲ)」でマルクスが念頭に置いていた主要な論者はトックやフラートンであった。オウヴァストンへの言及は「比類なく困難な問題」の解明のさいの傍論だった、と言うべきであろう。」(P387)と言う。

「(16)生産的利害と貨幣的利害との衝突とピール銀行法」

このなかで、注として、「すでに1853年から『ニューヨーク・デイリ・トリビュン』で、繰り返して、ピール銀行法〔1944年の銀行法——青山〕の仕組みを紹介しながら同法の誤りと恐慌時に貨幣パニックを激化させるその作用とを批判していた。」(P391)ことが述べられている。

大谷氏は、「マルクスはここで、発展した信用＝銀行制度のもとで資本主義的生産様式が到達する二つの重要な事態を指摘している。」(P395)として、①「利潤が他人の労働の取得であるばかりではなくて、この他人の労働を搾取するための資本も「他人の」所有物からなっている」ということと、②「貨幣資本家〔monied capitalist〕は他人の貯蓄を自分の「資本」にし、また、再生産的資本家たちが互いに与え合う信用や公衆が彼らに与える信用を自分の私的な致富源泉にする」こと指摘している。重要!!

むすびに代えて

大谷氏は、「第3部第5章は未完成なまま終わっている、とすることができるであろう。」「そもそも第5章を含む第3部第1稿の全体が未完成作品なのである。」と事実を述べたうえで、「彼にとってはさらにはっきりさせなければならない多くの論点があったとしても、現にわれわれに遺されているもののなかに、余人のなしえなかった極度に高い水準の分析が含まれていることは明らかであり、われわれはそれから学ばなければならない。」と言います。

・「第30～32章の草稿、それとエンゲルス版との相違」から

大谷氏の労作「第30～32章の草稿、それとエンゲルス版との相違」をもとに、「草稿」と「エンゲルス版」との相違で、私が留意すべきと思った若干の点について見てみましょう。

・ P454-455 注 505)

「産業循環の周期」について、「これまでのところでは、このような循環の周期の長さは10年か11年であるが、……循環の周期はしだいに短縮されるということを推論せざるをえないのである。」と述べていることを、脚注でエンゲルスは優しく訂正し、同時に、例を挙げて、「こうして、古い恐慌の再現を妨げようとする諸要素の一つひとつが、はるかに激しい将来の恐慌の萌芽を宿しているのである。」と補足して「産業循環」が「資本主義を発展させる」ことの真の意味を明らかにしています。極めて適切だと思います。『資本論』第三部「第三〇章 貨幣資本と現実資本Ⅰ」(大月版⑤P626)参照。

・ P456 注 514)

エンゲルスは、草稿の「恣意的な銀行立法(1844-45年のそれのような)」を「1844-45年のそれのような無知で間違った銀行立法」と編集しました。文脈上、非常に適切な表現ですが、マルクスは草稿の「恣意的な銀行立法」という言葉のなかに「あらゆる種類の銀行業者や〔貨幣〕資本家に豊かな収穫を与える」という「恣意的な銀行立法」という意味を含ませて、このような表現をしたのかもしれませんが。

・ P464 注 628) 草稿のとおり訂正すべきです。

・ P465 注 642) 草稿のとおり訂正すべきです。

・ P488 注 811)

『資本論』「第三章 貨幣資本と現実資本Ⅱ(続き)」の中の「現実資本すなわち生産資本および商品資本の蓄積については、輸出入統計が一つの尺度を与える。そして、いつでもそこに示されているのは、10年の循環周期で運動するイギリス産業の発展期(1815-1870年)のあいだは、いつでも、恐慌の前の最後の繁栄期の最高限が、次にくる繁栄期の最低限として再現し、それからまたそれよりもずっと高い新たな最高限に上がって行くということである。」(大月版⑤P641)というよく引用される文章ですが、「いつでも、恐慌の前の最後の繁栄期の最高限が、次にくる繁栄期の最低限として再現し、それからまたそれよりもずっと高い新たな最高限に上がって行くということである。」という部分が草稿では「どの恐慌期のあと等々でも、その前の産業循環で達成された最高水準が、次の産業循環での土台または比較的低位の水準となること、を示しておきたい。」となっています。エンゲルスは『資本論』の編集にあたって、わかりやすく鮮やかな表現に努めましたが、「次の産業循環での土台または比較的低位の水準となる」というところを「次にくる繁栄期の最低限として再現し」と変えたことは、『資本論』を邪に利用しようとする人たちに利用される恐れがあるので、草稿のとおりの方がよかったかもしれません。

・ P521 注 1205)

このエンゲルスの補足挿入文がなければ理解できません。極めて適切です。

・ P530 注 1304)

このエンゲルスの補足説明を加えた文章は、マルクスの文意を汲んだ、理解をおおいに助けるもので、非常に適切です。

・ P549 注 1536)

このエンゲルスの補足説明も、「1844年の銀行法」の本質を明らかにし、読者の理解を助けるうえで大変重要な指摘です。

「第30～32章の草稿、それとエンゲルス版との相違」を通読しての私の評価

エンゲルスは、わかりやすく鮮やかな表現に努め、適切な補足も行ない、幾つかの細かい訂正すべき点はあっても、そのような誤りは集団編集の MEGA でも多数あり、その編集の完成度は、本当に、卓越したものと思います。

なお、大谷氏が、草稿、MEGA、『資本論』を丹念に調べられたことに、心から、敬意を表したいと思います。

・「補章6 マルクスはmonied capitalという語をどこからとったのか」から

大谷氏は、ここでマルクスが使った monied capital という語の源泉とその使用法について論究しています。

大谷氏の論究の成果

・大谷氏は 563 ページの注 18)で『1861-1863年草稿』で「Geldcapital という語が利子生み資本の意味で使われており、この Geldcapital の人格化がここでは Geldcapitalist とされて」おり、第3部第1稿の第1章でも「貨幣資本〔Geldcapital〕」という言葉が使われている、と言う。

・そして、大谷氏は 564 ページで、「monied capital という語の場合、……「monied capitalist がもち、運用する資本」という意味で、銀行業者や金利生活者がもち、運用する資本を意味する場合のほかに、「貨幣形態にある資本」という、より広い意味あるいは、より漠然とした意味で理解されうるからである。実際に、英米での用例を見ると、そのなかには、このような意味で使われている場合が非常に多くある。」、と言う。

・最後に、大谷氏は 566-7 ページで、マルクスは、「イギリス人」が monied capital という語を「資本がその循環のなかでとる形態としての貨幣を意味する money capital(すなわち Geldkapital)とは区別して、「利子生み資本等々」の意味で使っている」と言っていることを述べ、マルクスが、「英語は、そも資本なるものの一般的形態規定性としての money capital と特殊な資本種類としての monied capital とを区別することを許す。」と理解していたことを告白します。

大谷氏の「おわりに」の結びの言葉

大谷氏は「補章6」の最後、「おわりに」を下記のように結んでいます。

「もしマルクスが自分で『資本論』第3部のドイツ語版を仕上げることができたとしたら、草稿でいたるところで使った monied capital というこの英語を、エンゲルスがそうしたように、なんらかのドイツ語に置き換えなければならなかったのではないかと考えられる。その場合、マルクスはどのような処理をしたのだろうか、これについて確たることを推測させるような手がかりは見あたらない。したがって、エンゲルスの処理、すなわちマルクスの「monied capital を「貸付資本」、「貸付可能資本」、「貨幣資本」などとした処理がどの程度適切であったのか、ということについても、確定的な判断をくだすことはできない。さきにも触れたように、マルクスは、さきに触れた第2部第2稿での脚注で monied capital という語を記したのち、その後は monied capital という語はまったく使っていないのである。」(P596-597)

青山の「補章6」雑感

大谷氏は、「はじめに」で「エンゲルスは、マルクスの草稿を使って第3部を編集するときに、この語をほとんどすべてドイツ語での「貸付資本〔Leihkapital〕」、「貸付可能資

本〔Leihbares Kapital〕、「貨幣資本〔Geldkapital〕」などの語に置き換えたので、第3部の現行版では、マルクスがこの語を頻用したことがまったく見えなくなっていた」（551-552）といい、『マルクスの利子生み資本論2』では、[ホームページ5-2](#)で見たように、第25章に関して、「monied Capital」という言葉をエンゲルスが「貨幣資本」と訳したことについて、「エンゲルスは——ドイツ語での印刷用原稿を作るためにはやむをえなかったことではあるが——monied Capital等々も、ドイツ語(Geldkapital)に訳して統一した。そのために、原文のニュアンスが失われている場合もあるように思われる」（『マルクスの利子生み資本論2』P103）と言って、エンゲルスを批判しています。

しかし、大谷氏は、「補章6」の論究を通じて、monied capital という語が「monied capitalist がもち、運用する資本」という意味で、銀行業者等が運用する資本を意味する場合のほかに、「貨幣形態にある資本」という、より広い意味で使われ、実際に、英米での用例を見ると、そのような意味で使われている場合が非常に多くあること、そして、マルクスが monied capital という語を「利子生み資本等々」の意味で使ったのは、マルクスが、「イギリス人」は monied capital という語を「資本がその循環のなかでとる形態としての貨幣を意味する money capital(すなわち Geldkapital)とは区別して、「利子生み資本等々」の意味で使っている」と誤解していることにもとづくものであること、がわかりました。

だから、『資本論』第3部のドイツ語版を仕上げる場合、「利子生み資本等々」という特別の意味を独占していない「monied capital」という外来語を「利子生み資本等々」という特別の意味を持たせてドイツ語版で使う理由・根拠がなくなり、「原文のニュアンスが失われている場合もあるように思われる」とまで言っていた大谷氏は、草稿中の「moneyed Capital」、「monied Capital」、「monied capital」という言葉について、エンゲルスがなるべくわかりやすく草稿の内容を損なわないように考えて——例えば、[ホームページ5-2](#)「大谷禎之介氏の『マルクスの利子生み資本論』(全4巻)とマルクス・エンゲルスの『資本論』から学ぶこと」のPDFファイルの14ページの『資本論』第三部第二十五章(大月版④ P168-171)の文章を参照して下さい——、「貨幣資本〔Geldkapital〕」、「貸付可能な貨幣資本〔Geldkapital〕」、「貸付資本〔Leihbares Kapital〕」、「貸付可能資本〔Leihbares Kapital〕」、「自由に利用できる貨幣資本(Geldkapital)」と表現したことに対し、「エンゲルスの処理、すなわちマルクスの」monied capital を「貸付資本」、「貸付可能資本」、「貨幣資本」などとした処理がどの程度適切であったのか、ということについても、確定的な判断をくだすことはできない」と、言わざるを得なくなってしまいました。

この大谷氏の対応は、不破さんに比べれば大変真面目で正直なもので、雲泥の差があります。しかし、『マルクスの利子生み資本論3』の多くのスペースを使って、「monied capital」という語について、①一般的であった(大谷氏)とか②当時イギリス人が普通に用いていたとは考えられない、マルクスの造語だ(小林氏)とか③マルクスはトックによるこの語の使い方を評価しながらこの語を使ったのではないか(大友氏)とか、などということを論じ合うのであれば、むしろ、大谷氏は「エンゲルスの処理」が「原文のニュアンスが失われている場合もあるように思われる」などと言ってしまったのですから、あとになって、「適切であったのか」「確定的な判断をくだすことはできない」などと無責任なことを言うのではなく、自らの言葉に責任をもって、「原文のニュアンスが失われている場合」があるのかどうかを徹底的に調べるのが、義務ではないでしょうか。

「第三〇～三二章」にかかわる大谷氏の論及についての青山の総括

大谷氏が、「Ⅲ」に登場する 11 個の基本的なタームについて」の「(1) monied capital」(P204-209)で「草稿で monied Capital または moneyed Capital となっているところのほとんどをエンゲルスが『貸付資本』に変更していたのである」と述べていることについては、「青山の「補章 6」雑感」で見たとおり、エンゲルスの編集上の判断に誤りがなかったことは明らかです。

大谷氏は、「解題」で「第三〇～三二章」について、「エンゲルスによる編集作業というスクリーンを通して」マルクスの第 3 部第 1 稿を見ていたが、「そのスクリーンがぶ厚い不透明なものであった」といい、草稿には「マルクスの本当の姿がある」(P203)と言いますが、「エンゲルスによる編集作業」によってどのような「スクリーン」がはられ、「マルクスの本当の姿」がどのように見えなくなったのか、あるいは歪められたのか、『マルクスの利子生み資本論 3』のなかで一言も語ってくれませんでした。

私は大谷氏の『マルクスの利子生み資本論 3』と『資本論』とを並べて読むことを通じて、大谷氏の「第 30～32 章の草稿、それとエンゲルス版との相違」についての丹念な調査に敬服するとともに、いやそれ以上に、エンゲルスの、幾つかの細かな訂正すべき点はあるにしても、多くの重要で適切な補足を含む、わかりやすく鮮やかな表現に努めた「編集」のとてつもないエネルギーに感服いたしました。

私たちが『資本論』の「第三〇～三二章」から、「第三〇～三二章の編集の経緯」で述べたことを踏まえ、「第三〇～三二章の内容の概要」で論及したようなことを学ぶことができ、これらを発展させて、2020年の「ダボス会議」の討論会で、「株主至上主義」を前提とする資本主義について、「我々の知っている資本主義は死んだ」という声や、「全ての関係者(ステークホルダー)に配慮することが事業継続の条件になる」というところまで危機が深化した現代の資本主義を乗り越える理論的な武器を「発明」し「資本の力」を消し去るために、エンゲルスが編集した『資本論』は巨大なエネルギーを私たちに与えてくれています。

「マルクスの本当の姿」がマルクスの草稿を通じて、エンゲルスが編集した『資本論』を通じて、私たちに呼びかけているものは、「エンゲルスによる編集作業」によって作られた「スクリーン」の除去などではありません。科学的社会主義の思想を資本主義を乗り越える助産婦の武器にして、労働者階級のエネルギーの源にして、新しい社会を生み出すことです。そしていま、「エンゲルスによる編集」の「不備」を口実にして、「草稿」と『資本論』を改ざんして、そのカバーに「マルクス『資本論』」というタイトルをつけた贋作が、厚顔無恥にも、「前衛党」を名乗る政党の「機関紙」で大宣伝されていることを忘れてはなりません。